

芸術化する現場のフィールドワーク

## 「まちとアート」の練習問題

TAM(トヨタ・アートマネジメント講座)は、トヨタ自動車(株)のメセナ(芸術文化活動)の一環として、1996年より全国各地で開催されているもので、すでに50回を数えました。それぞれの地域に根ざしたアートマネジメントの可能性を模索し、芸術活動と地域社会を結ぶ人材の育成をめざしています。

第51回となる大阪セッションは、應典院寺町倶楽部とトヨタ自動車(株)との共催で開催いたします。最大のポイントはフィールドワークで、それぞれの現場の中核を担う人々の実践に触れ、参加者自身が「立ち上げ力」や「段取り力」を駆使する体験を通して学ぶことにあります。アートマネジメントはもちろん、文化政策やまちづくりに関心のある方々にとっても有意義な機会になること、まちがいなし。詳しくは同封のチラシをご覧ください。

ぜひ、ご参加いただきたいとともに、会員のみならずからご紹介をいただければ幸いです。

2004年1月24日(土) 13:00~18:00  
25日(日) 9:30~16:30

- 会場…應典院(※2日目のフィールドワークは現地集合)
- 参加費…一般2,000円、学生1,500円(※2日間通し、交流会は別途)
- 定員…90名(※先着順)
- 申込み…FAX、E-mail、郵便で受付(※電話申込不可)

※詳細は、チラシ参照

## いのちと出会う会

いのちについて語り合う場として定着した「いのちと出会う会」。1月と2月の予定をお知らせします。

第36回

1月22日(木)  
「地雷畑で見た夢」

話題提供者

テラ・ルネッサンス代表 鬼丸昌也さん  
こころの地雷を取り除こう……。地球上には、現在、70カ国以上で推定1億個もの地雷が埋まっています。その犠牲は年間2万人ともいわれ、戦争が終わった地域でも、とくに子どもたちが地雷の犠牲になっています。このことに無関心でいてはますます悲劇を生みます。地雷、そして人々の心の中の憎しみの地雷を取り除きたい、と世界的に活躍している23歳の若き活動家の熱き思い

をお聞きください。

第37回

2月19日(木)  
「『闘病闘唄』トークとミニライブ」

話題提供者

シンガー・ソングライター KOUTAROさん  
末期ガンと宣告されたKOUTAROさん。奇跡を信じて放つ唄声。「誰でもつらい時あるよね。だけど元気出せよ、あきらめないで。時にはくじけたり、泣いたりしても、信じているから、あきらめないで……。その歌詞、メロディからつむぎだすのは、ガンを患った自らの運命に真正面から立ち向かっていこうとするKOUTAROさんの「闘病闘唄」です。病氣や困難と闘っている人々に捧げます。

※いずれも18:30開会、21:00閉会  
※参加費：会員800円、一般1000円

年末恒例・自分感謝祭は  
12月26日に開催!!

恒例の自分感謝祭は、例年どおり12月26日に開催します。

この儀式は、今年一年をふり返って、自分の行いを懺悔する、應典院だけのオリジナル法要。一人ひとり、懺悔のカードを仏前で浄梵(聖なる火)にくべ、新年の新たな出発を誓います。荘厳な電子オルガンの演奏の中、光に包まれながら、一年の終わりにふさわしい「鎮めの儀式」を堪能してみませんか。

なお、18時からの夜の部は、終了後に「年忘れ交流会」を開催、持ち込み歓迎ですので、こちらもふるってご参加ください。

應典院主催/寺町倶楽部協力。

◆日時:12月26日(金)

①14時~ ②18時~

◆参加費無料(交流会は参加費1000円)

◆数珠をご持参ください。

◆申込みは事務局まで

### 【新入会員ご紹介】

(2003年12月20日まで)

前号以降、新規にご入会いただいた方は、いらっしゃいませんでした。

なお、(株)銭辰堂様より下記の通り、ご寄付を頂戴いたしました。紙面を借りてお礼申し上げます。

○寄付

(株)銭辰堂 金50,000円也

### ザリュ VOL. 41

應典院寺町倶楽部のニューズレター

発行日 2003年12月20日  
(偶数月発行)

編集長 川井田祥子

スタッフ 池野亮、大塚郁子

発行所 應典院寺町倶楽部

〒543-0076

大阪市天王寺区下寺町1-1-27

TEL 06-6771-7641

FAX 06-6770-3147

# Salut

應典院寺町倶楽部のニューズレター

vol.

41

ザリュ

フランス語で救いの意



## コモンズフェスタ2003 特集号

2003.December

アートを核にした今年のコモンズフェスタ。立ちつくして絵画を注視したり、窓に顔を寄せて壁地でのダンスをながめたり……真剣なまなざしで見つめる人々が應典院の空間にあふれた。アートに触れて生まれた感覚を大切することは、私自身を大切にすることだ。そして他者の感覚も大切に、多様な生き方を尊重することにつながるだろう。これがアートのひとつの力かも知れない。

# “ちがい”をつなぐ“共”の場、盛大に開催!



北山善夫作品「歴史は死者がつくった」

第12回大阪生涯学習フェスティバル協賛事業

## コモンズフェスタ2003

Art Commons

～芸術で“ちがい”をつなぐ～

日時●11月7日(金)～9日(日)  
会場●應典院

【主催】  
應典院寺町倶楽部

【後援】  
大阪府  
大阪市  
大阪市教育委員会  
(財)大阪都市協会  
(財)大阪21世紀協会  
(社福)大阪市社会福祉協議会  
(社福)大阪ボランティア協会  
(財)大学コンソーシアム京都

【協賛】  
アサヒビール株式会社  
大阪ガス株式会社  
トヨタ自動車株式会社

【協力】  
芸術とヘルスケア協会  
日本アートマネジメント学会・関西部会  
日本ボランティア学会  
京都橘女子大学  
(特活)関西NGO協議会  
(特活)関西国際交流団体協議会  
上町台地からまちを考える会  
(社)企業メセナ協議会助成認定事業  
「関西元氣文化圏」参加事業

## 開催プログラム一覧

11/3(祝)～9(日)  
・展覧会「eternal～永遠」  
(北山善夫・樋口よう子)

11/7(金)  
・第38回寺子屋トーク  
「まちとアートの底チカラ」  
～芸術は社会に何ができるか～  
(中山夏織・今中博之・猿田洋子)

11/8(土)～9(日)  
・2Days Drama Cafe  
～SPACE×DRAMA2003参加劇団によるカフェ～  
(千年枕・劇団鹿殺し・しかぼんび・  
me-te-lui-luiXXX・劇団アクスピ・  
特攻舞台Baku-団・満月動物園)

11/8(土)  
・あなたも裁判官に選ばれる!?  
～来年できる市民参加の“裁判員”制度とは?～  
(司法NPO～当番弁護士制度を支援する会・大阪)  
・ディスカッション劇『おーい、こっちこっち』  
～支援費制度を考える～  
(あかね連絡会)

・ダンス・ソロ公演「彼岸(あなた)から」  
(岩下徹・志賀玲子)  
・小暮宣雄助教授ゼミ  
～京都橘女子大学、文化政策論～

・北山善夫による作品紹介  
・ダンス・ソロ公演「此岸(ここ)から」  
(岩下徹・志賀玲子)  
・アーティスト・トーク  
(北山善夫・岩下徹・樋口よう子)  
・交流会「Art Commons Party!」

11/9(日)  
・ダンス・ワークショップ  
「少しずつ自由になるために」  
(岩下徹・志賀玲子)  
・朝鮮の古典的な民俗芸能を体感する  
～在日コリアン3世がうたう「パンソリ」って!?～  
(在日韓国国民主人権協議会)

・哲学カフェ  
「身体からわき出る言葉に耳をすます」  
(臨床哲学研究室)

・森栗茂一教授ゼミ  
～大阪外国語大学、都市研究室～  
・社会人大学院生 出前ワークショップ  
～大阪市立大学大学院 創造都市研究科  
都市経済政策研究分野～

＜関連企画＞  
10/19(日)  
・「生を考える」ワークショップ  
(北山善夫・樋口よう子)

應典院寺町倶楽部の秋の恒例事業となった、コモンズフェスタ。コモンズとは、パブリック(公)でもプライベート(私)でもない“共”を意味し、“共生”を基盤にした市民社会の実現をめざして開催しています。

6回目を迎える今回はアートを核に、異分野・異世代などの“ちがい”をつなごうと、さまざまな企画を展開。NPOや劇団など15団体が、17のプログラムを実施し、期間中のべ800人の参加者でにぎわいました。

期間中、どんな出会いと対話が生まれたのか。コモンズの運営に携わったメンバーの「現場からのレポート」をお届けします。

## 「コミュニティ・エンパワメント」をアートで

### 関係性喪失の時代

95年の阪神淡路大震災を契機に、日本は本格的な市民社会に入ったと言われるが、一方で「関係性の喪失」が急速に進んでいる。子どもや若者が異世代・異分野の人々とうまく関わらず、IT(情報技術)化が進む中、身体性を伴うリアルな人間関係はますます希薄になっている。右肩上がり成長の時代に効率性や合理性を追い求めた結果、一元的な価値観に染め上げられ、人々は「パブリック(公)」と「プライベート(私)」の二極に引き裂かれていると言えるだろう。異なる世代や価値観といった“ちがい”と出会い、異なった部分を尊重しながらつながる、多様な場としての「コモンズ(共)」を創出できる“市民知”が、いま求められている。

### アートが引き出す「学び」

應典院寺町倶楽部はしばしば芸術のワークショップを催すが、そこでは世代や立場の違いなど異質なものが出会い、対話を重ねながら、プロセスから生まれる関係性や場を一人ひとりが「学んで」いく。アートには創造力や批判力、あるいは共感する力を育む力があり、市民の主体的な「学び」を引き出す魅力的なインセンティブ

(刺激、誘因)となり得ることを確信している。

今回のコモンズでは北山善夫さんと岩下徹さん、2人のアーティストから「生と死」という人間の実存的な問いを投げかけられた。若い参加者たちは、ふだんあまり考えたことのない問いに直面し、とまどいを感じたかも知れないが、それは人間としての起点、いのちの原点に気づき直す貴重な体験＝学びになったのではないだろうか。

### 「アート・オブ・ライフ」をめざして

コミュニティには潜在する資源がある。スローライフの時代、人々が生活をより深く創造的に営むために、経済的価値だけでは測れない資源を市民自らが引き出す、「コミュニティ・エンパワメント」が切実に求められている。

コモンズで“ちがい”と出会った参加者たちに芽生えた「共」の感覚を育み、根づかせていくために、その終了後も継続して「OSAKAアート・コミュニティ・プロジェクト」を展開する。アートによって、コミュニティに潜在している資源を引き出して、いような人材の育成を企図しており、学び合いの活動を通して、一人ひとりの「アート・オブ・ライフ＝生の芸術化」をめざしていきたい。

應典院寺町倶楽部事務局長 秋田光彦

## Special Thanks

池内伸行  
柏木知子  
上村忠則  
畔柳千尋  
白澤英司  
十河宏栄  
高田智子  
塚原有紀  
中村智子  
福田祐子  
劇創社

劇団メロディアスメロン

# COMMONS FESTA2003

美術とダンスの融合、「生と死」をめぐる対話

アート・コラボレーション・プロジェクト「交流～communication」のひとつ、アーティスト・トークが11月8日ダンス公演終了後に、北山善夫さんと岩下徹さんを迎え、樋口よう子さんの司会により行われました。美術とダンス、アーティストと観客、さまざまな“ちがいを”越えて語られた内容をお伝えします。

美術とダンスの出会い

樋口●一般的な“舞踏”のイメージは、「全身白塗りで動きも非常に特徴的」というものです。岩下さんは舞踏グループ「山海塾」のメンバーですが、ソロで踊られるときは舞踏ではなく、しかも今日のように即興で踊られます。今回は初めての絵画とのコラボレーション(協働)だったんですが、いかがでした?

岩下●絵がすごく強かったですね。グーツと押されるというか、絵が迫ってくるような圧力を感じました。北山さんはどういうふう

に作品を選ばれたんですか?  
北山●ここが寺院であることと、ちょうどいまイラクで戦争が起こっていて、宗教の問題は無視できないと思ったことが大きいですね。本堂に展示した4作品のうち3つは女性を描いた作品で、「良妻賢母」という作品は若桑みどりさんの本を読んでヒントを得ました。戦死した夫を拝んでいる妻は、がんばって息子と娘を戦士と戦士の妻に育て上げる。つまり、戦争に疑問をもたないまま、立派に「銃後の守り」を果たすわけです。



岩下●軍国の母ですね。

北山●そうです。その向かいに展示した「暴力」は、人間の暴力性を見つめたものです。人は人を殺す可能性がある。戦場の兵士も任務として人を殺さなければいけません。平気で殺せるはずはなく、彼らも心の傷を負っているでしょう。それなのに、なぜ戦争をやめないのか。人間の宿命でしょうか。  
岩下●業のようなものを感じますね。作品はどれも個性的で、見たときの自分の感覚がそれぞれ変わります。

樋口●今回の展覧会は「生と死」が重要なテーマなので、そこにこだわって北山さんは展示作品をお選びになったわけですが、出産の絵を数年前に伊丹の展覧会で見たとき、とても驚きました。男性の北山さんがリアルな絵を描かれたことが、ある意味ショックというか……なまなましくて、私は直視するのがつらいですね。

北山●人間はどこから生まれてくるのかということが、僕にとっては死と同じくらい大事なテーマなんです。

岩下●僕も今年の夏に京都の展覧会で拝見したとき、やっぱり最初はギョッとしました。でもちゃんと観ると、静かに響くものがありましたね。それで、今日は踊りでこの絵と関わることができたんですが、赤ちゃんが生まれようとしているので、なんとなく手が伸びていって、そのまま抱えるようにしながら歩いていくうちに、女性が磔刑になっている絵と対峙しちゃったんです。そしたら、そのまま、すうっと気化していったというか、昇華した感じになりました。

対峙して発見できたもの

樋口●昼間は墓地での公演でしたが、墓地で踊る体験も初めてだったんですか?

岩下●お墓の中で踊るといのは非常に珍しいことですね(笑)。お寺の境内で踊っているとき、たまたま墓地に迷い込んだというのがありますけど、最初から墓地で踊ることにしたのは初めてです。実際にやってみて、一つひとつのお墓が表情を持っているので、それぞれに語りかけるように踊ることができたり、お墓も語りかけてくれるようでした。

ただ、よくわからなかったのがお客様の反応です。通常、舞台はお客様と一緒に作る場なんですが、お客様が建物の中にいて窓ガラスが反射して黒くて見えなかったの、ちょっとやりにくかったです。

樋口●2階のロビーは鈴なり状態というか、満員でした。お屋の公演もご覧になった方の感想を聞いてみましょうか。どなたか、いらしゃいます?

観客A●私は朝日新聞の記事を見て来ました。岩下さんのことも應典院のことも全然知らなかったんですが、65歳になったいま、筋の通ったというか、一つの物事を貫き通していらっしゃる方に一人でも多く会いたいと思って……。屋間はガラス越しだったので、「この人の空気を感じられないから嫌だなあ」と正直思いました。それで夜の公演も観たいと思って、またお会いできて、なんとも言えない気分です。感動して満足して帰ります。明日からの私の生き方にプラスになる、そう感じました。

岩下●ありがとうございます。

北山●僕が感じたのは絵画との対峙です。



北山善夫さん



岩下 徹さん



樋口よう子さん

絵は一瞬を切り取った静止画像で、形や色は固定していますね。岩下さんは踊られて汗をびっしょりかいて、血管が浮き上がってきた。ピュッと切れば血が噴き出す感じ。永久に固定している絵と過ぎ去っていく踊り、僕の描いた作品は白黒で岩下さんはカラー、という対比が印象的でした。

それと、僕自身は絵を、独自の形式や制度を考えながら描いていますが、岩下さんの踊りを見ていると西洋のパレエとは違

って、日本人独自の精神的なものを身体に結びつけておられるように感じます。

岩下●僕は日本人であることは間違いなく、日本人の身体でなされている踊りです。ただ、僕の踊りはいろいろな影響を受けていて、いわゆる「日本的なもの」も含まれていると思いますが、そうでないものも入っているでしょう……。よくわからないですね。「いま、ここで生きている日本人」の身体でなされる踊りであるという感じでしょうか。

関西の“元気”との出会い、コモンズフェスタ

猿田洋子(長野県駒ヶ根市市議員/特活)こまがね演劇文化創造劇場事務局長)

オープニングイベントである寺子屋トーク「まちとアートの底チカラ」のゲストとして呼ばれ、コモンズに参加しました。トークは「芸術文化の創造性を高めることで、市民の活力を引き出し、社会全体のクリエイティビティをどう形成すべきなのか。また、そこから政策や経済はどのように新たな基盤づくりをめざすべきなのか、関西再生のために創造的な議論を……」という、たいそうなテーマ!! 私が話したのは地元駒ヶ根市で10年間行ってきた、演劇による地域の人づくり活動について。私の話が参加者のみなさんのお役に立ったかどうかは不明ですが、トーク後の「ワンコイン交流会」では、大阪の行政関係者、まちづくりコンサルタント、NPOやアート関係者、ならびに、それらに関心のある学生などなど、非常に高い意識をもった方たちと刺激的な会話ができて、私自身本当に楽しかったです。「関西の衰退」と言うけれど、外から見ていると関西には「人の元気」がものすごくあると思いました。

2日目の岩下徹氏のダンス・ソロ公演、墓地を舞台とした「彼岸(かなた)から」。そして、北山善夫氏の「生と死」をテーマとした大型絵画作品を前にした「此岸(ここ)から」……。 「お寺」という、人の生と死に関わる空間を舞台とした「アート」との出会いは、新鮮な感動を与えてくれました。

コモンズの催し物は、私が参加したそれだけにとどまらず、3日間の開会中、さまざまな催しが開かれ、さまざまな人々が「お寺」に集っていました。とくに若手演劇人、インターンの学生など、若者の「やる気」が心地よい刺激でした。

秋田住職は「寺は本来、地域の学びの拠点だった。それを再生し、日本社会を変えていく」と言います。また、「文化とは人と人との関わり、つながるための絆となるもの」とも。應典院には「ここから地域を再生し、関西を、日本を変えていこう」という「熱い」思いがあふれていました。

私にとっては初めての、應典院「コモンズフェスタ」は、関西の「元気」との出会いです。人と人の関わり、つながりの中で、自分の地域ももっと「文化」で変えていきたいと思いました。

樋口●北山さんはご自身の絵を日本画だとおっしゃってますね。

北山●はい、日本画だと思っています。正確には、日本の絵画ですが。

樋口●舞踏は日本で生まれ、世界に誇れる芸術の一つですが、岩下さん自身はソロ公演での踊りを、どう位置づけておられるのですか？

岩下●人から舞踏だと言われるときもあるし、舞踏じゃないと言われるときもあって、よくわかりませんね。自分では舞踏ではな

く即興ダンスだと言っていますが、どこから出てきたのかと問われると、やはり舞踏で、それは間違いないことです。でも、舞踏自体がはっきりと定義されないままなので、舞踏の定義を根本からはじめないといけな

死を見つめ、どう向き合うか

観客B●北山さんに伺いたいんですが、死を扱った絵を描かれることによって、自分

の中に溜まっているものを作品に込めるとい

うか、自分が浄化されるから描かれているんですか？  
北山●浄化しようという意識はないし、自分という個人の死だけを扱っているつもりもないんです。もっと大きな死、歴史あるいは社会の死というものを見つめると、死と生、生と死、またその次に生がくる、というように循環がある。つまり、とても多くの人があるに参加してるわけです。宗教や戦争ともからんできますが、社会の死を探しています。  
観客B●たまたま読んだ本の中に、生物は遺伝子を継承させていくために死を選んだとありました。でも、人は心というものを

持ってしまい、心は恐怖のために死を受け入れられない。それゆえ、神を求めるといことも書かれていたんですが、神様のことはどうお考えですか？  
北山●神を信じるということではなく、人間はどうしても神を持たざるを得なかった。人々の精神的なあり方をよく見ると、やはり神を創造せざるを得ない。たとえ無信仰の人でも、生きているかぎり人は明日を信じている、明日は必ず来ると信じています。昨日と今日は確かに来ましたが、明日や未来は絶対に来るとは言えない。なのに、確かに来ると考えるのは信仰だと思んです。明日は来ないと思ったら生きていられないでしょう？それが人間の精神のあり方だと思います。いつかは必ず死ぬんですけどね。  
樋口●「歴史は死者がつくった」という作品を私が最初に拝見したとき、壊れている人はもっと少なく、絵の中にいっぱい白地がありました。でも、発表されるたびに壊れている人がどんどん増えてきて、いま世の中を写し取っているようですね。テレビでも新聞でも血なまぐさい事件が連日のように報道されていますし、北山さんはやっぱり書き足したくなるんですか？

北山●5回くらい発表しているんですが、毎回足りないように感じて書き足しています。アメリカのニュースでは日本よりもっとリアルな映像を流しているらしいですが、次第に人々は慣れて無感覚になってしまうので、そのことを警告している研究者もいます。報道で死をどう扱うかは大きな問題ですね。

僕も新聞記事をもとにドローイングを描いているし、ワークショップも行ってます。描くことによって、現在その人自身の持っている死生観が表れてくるんですね。参加者の中には事件の被害者だった方がいたりして、いろいろ考えさせられます。自分が絵を描くだけではなくて、社会と関わるということは……その方の心の中の表明までしていただくわけですから。

「終わりになる」表出

樋口●今日の公演で岩下さんはダンサーという主役ですが、途中で絵を見上げるシーンや絵から出てくるようなシーンがあって、ダンサーでありながら観客でもある。本当にコラボレーションと呼ぶのにふさわしくて、一緒に作り上げている感じがした。絵を見たイメージをどういうふう

に踊りに変換しているんですか？  
岩下●パッと入ってくるもので身体感覚が変わるので、それが動きのモチーフになります。でも、そういうものは長続きせず、非常に短い時間です。ずっと消えていくと、また違うものがやってくるんですが、たまにやっこないときもあります。そのときは本当に困ります。耐えなさいいけない時間ですね。  
北山●今回はあったんですか？  
岩下●ありました。前半に飛ばし過ぎまして、後半はちょっとしんどかったです。しんどくて、なかなかリズムが変化しなくなって、そういうときに止まってしまうんですね。止まったときはそのことを受け入れて耐えればいんですが、こらえ切れなくなって動き出して



身体感覚の気づきから生まれた言葉、新たな思考

～哲学カフェを運営して～

岸田 智(大阪大学大学院・臨床哲学)

午前中の岩下さんのダンス・ワークショップに参加した人が、岩下さんも含めほとんどそのまま哲学カフェにも参加する形となりました。

身体と言葉。今回の哲学カフェのテーマだったと思います。哲学カフェというのは、言葉をつき合わせる場です。自分の発言と、それに対する周りの反応、他者の言葉の中で、自らが新しい思考にいたる考えの広がりを得るプロセスの経験の場です。だから言葉を発することが大切。他者の反応がすぐに跳ね返ってくるのです。

参加者の中には、たんに岩下さんのファンの方やダンス好きの方だけではなく、演劇をしている方や、自分の体に悩みをもつ方の参加もありました。多様な人々の間から浮かび上がった言葉があります。それは、身体「表現」と「表出」という2つの言葉。それらの言葉の意味や違いについて、白熱した議論が取り交わされました。

今回、参加者がストレートに自分の体験や思いを語り合えたことには、岩下さんのダンス・ワークショップが大きく関係していると思います。ワークショップで実際に身体を動かし、自分の身体を新たに感覚するという体験を経ることで、身体について偽りのない自分自身の言葉で語るということができたのではないのでしょうか。(インタビュー：唐沢 民)

しまうときがあります。要するに、ごまかしちゃうんですね。

樋口●全然そんなふうには見えませんでした。

岩下●今日はなるべくこらえましたから。それと、視覚から入ってくるものを動きに変換していくのは時間差が少しあります。耳から入ってくる音楽はすごく速いんですが、視覚の場合はどこか違うところに入ってから、体に入るので時間がかかるんです。

北山●大学で学生がパフォーマンスをするとき、終わり方がむずかしいと話していました。岩下さんは今日の終わり方をどうされたんですか？

岩下●昼間は20分経ったら合図を送ってもらうようになっていたんですが、やはり合図がきてもすぐに終わることはできないですね。終わりにするといふか、正確に言えば、自然と終わりになる瞬間まで踊る。「終わりにする」のではなく、「終わりになる」ですね。

【プロフィール】

北山善夫さん

1948年生まれ。美術家。1982年ベニス・ビエンナーレに立体造形作品を出品、1983年「第2回バンガラデシュ・ビエンナーレ」金賞受賞、1992年日本芸術大賞など受賞。近年は自らの体験により、「生と死」を主題にした絵画作品の制作に精力的に取り組んでいる。

岩下 徹さん

1957年生まれ。舞踊家／即興ダンス、山海塾舞踏手。国際的な舞踏グループ・山海塾の舞踏手である岩下徹は、ソロ活動では「交感(コミュニケーション)」としての即興ダンスの可能性を追求している。日本ダンスセラピー協会副会長。京都造形芸術大学映像・舞台芸術学科助教授。

自己と向き合う・ほぐす・そして日常へ

～ダンス・ワークショップと哲学カフェに参加して～

榛木 恵子(應典院寺町倶楽部運営委員)

私は「ダンス・ワークショップ」と、引き続き、恒例の人気イベント「哲学カフェ」に参加。ダンス・ワークショップでは、遅刻をしたので参加者でなく見学者として、参加されている約30名の様子を観察(いささか失礼ですが)することができました。

ワークショップといってもダンスを踊るのではなく、体と心(精神)のほぐしです。それは弛緩することから心のわだかまりや体の歪みに気づき、「気になる」ことから解き放たれていくことです。最後のメニューは、横たわり(リラクセス)から立ち上がる(自律)プロセスを、自分で時間も動作も確認しながら動いていくこと。一同の動作をながめていると、各自の個性が示されながら、何かを共有した一体感が表現されていたように思われました。

哲学カフェでは、ダンス・ワークショップの振り返りを中心に、参加型の話し合いが進められました。岩下徹さんも参加され、ワークショップに参加した人からのさまざまな感想やコメントが興味深かったです。一回りした頃から「表現」「表出」のKey Wordでディスカッションが高まりました。哲学カフェのみの参加者の中には、ダンスや演劇を通して表現に携わっている人もいて、ワークショップに参加した人たちとのテーマの絡まりは、哲学カフェらしいものでした。これらの場に出されたテーマは、個人が持ち帰り、それぞれの場で話し合われていくのだろうと感じています。

身体動作による心の解放～哲学カフェに参加して～

名畑 孝(應典院寺町倶楽部運営委員)

今回の哲学カフェは、山海塾の舞踏手である岩下徹さんによる「ダンス・ワークショップ」を体験してもらい、その後ほぐれた身体から、どのような思考が生まれるかという試みでした。岩下さんの即興ダンスは、日常生活と違った、目的を持たない動きをすることで、制度からはなれた場での、他人からは狂気にさえ見えるような身振りです。意識の作為を排除して生まれ出る動きを追究し、「何かを表現する」という他動詞的でなく、「何かが出発する」という自動詞的なあり方を求める。身体に動きをもたらすものは、型、習慣、他者との関係などであり、即興ダンスはそれらから自由になることなのです。日常生活の中で自由になることはむずかしいですが、ワークショップという場では、日常、人前ではできない動作をすることができ、その身体動作を通じて、少しずつ心が解放されて自由になっていく感覚が体験され、自分自身の可能性にめざめていくこととなります。身体感覚のメタモルフォーゼを体験した参加者は、非日常と日常の変移に、いくぶんかのとまどいを感じているようでもありました。

## 寄稿 さまざまな“ちがい”と出会い、 「生と死」を見つめたコモンズフェスタ

樋口よう子(展覧会「eternal」プロデューサー)

——毎日、大量に流されるニュース。とくに最近では凶悪な犯罪が目につく。ニュースでは、たえず自分を除いた人の死がある。テレビ画面の向こう、新聞記事に掲載された、マスメディアが取り上げる「死」。

もし、メディアの「死」のニュースを絵画にしたら……。ニュースを受け取る人、それぞれに感想やイメージは異なる。ニュースの受け取り方も、第三者、被害者、加害者とイメージする立場によってさまざま。そういったことを踏まえて絵画化すれば、自分自身の視点が出てくる。そしてそれは、一律なマスメディアに対して、個人の意見を社会に投げ返すことでもある。

「死」からイメージする「生」、「生」から「死」にいたる思いを絵で描いてみる。現実に関わりながら自分自身が「生きる」こと、そして、いつかたどりつく「死」。いま、じっくり見つめてみてはいかがだろうか。——

そうした呼びかけのもと、10月19日に應典院で、美術家・北山善夫氏のワークショップが行われた。ベニチュア・ビエンナーレで世界的にデビューし、2004年はハンガリー・ブダペストに2度目の出品をする大作家でさえも、ワークショップとなると期待と不安は入り交じる。

しかし当日、遠くは名古屋から、最年少は16歳という約30名の参加者を迎え、活気あふれるものとなった。北山氏によると、過去最高のすばらしいワークショップをすることができたようだ。

「生きる」ことのつらさ、「死ぬ」ことへの恐ろしさ。日常生活で忘れ去られていることに、まざまざと直面するということ。

「いかに生きるべきか」という永遠の命題。「eternal」。

「人が生まれ、死んでいく」という永遠の命題。「eternal」。

11月に開催されたコモンズフェスタ。大阪の中心部でありながら鎮守の社に囲まれた、見渡すかぎりの墓がある静寂に包

まれた場所で、踊った男がいる。日本が誇る舞踏、「山海塾」というダンス・カンパニーで活躍し、かつ、ソロで即興のダンスを突き詰める舞踊家・岩下徹氏。

その後、北山氏の作品に囲まれた本堂ホールでのダンス。観客との間を計りながらの巧みな即興ダンスは、見る者を引きつけてやまない。作品への熱い語りかけとダンスとの共存。

公演後、熱く語られた美術家・北山氏と舞踊家・岩下氏との対談。深く考えさせられるものでいっぱいであった。絵画での表現と身体での表現。一場面をとらえて残りゆく「表現」と時間の経過で過ぎ去る「表出」。美術表現と身体表出との時間差と空間との差異。これは永遠の課題であり、特色である。「eternal」。

翌日の「哲学カフェ」で再確認させられ



### 【プロフィール】 樋口よう子さん

大阪市生まれ。高校美術教員。1996年から歴史ある大阪市平野郷を舞台に、13人の現代芸術家がまちに繰り出し、人々と触れ合う試み「モダンde平野」を開催。97年、美術展「芸術祭典・京」入賞。コモンズでは過去3回、アート・プロジェクトをプロデュース。大阪府文化振興懇話会アドバイザースタッフの一人。

た西洋との文化の違い。バレエと舞踏。爪先で立って踊る。地を這うように踊る舞踏。人間が立ち上がるとは、どういうことかを深く問いつめる。「表現」と「表出」との違い。にじみ出る自己の思い。芸術と言葉の差異にとまどいながら、應典院さながらの、さまざまな生き方と悩みと直面する。

芸術の表現は多様である。何が正しく何がまちがっているか。善悪の基準をも越えて、後世の評価を待つばかりである。場所と時間で変化する芸術表現があり、時代を越えても残る芸術家がいる。その世代の特色を表現しながら、そのときどきの社会状況をも網羅する。

多種多様な人々が集い、行き交う社会。とくに應典院での「コモンズフェスタ」は、さまざまなジャンルが行き交う。明日を見つめて生き、未来を考えて、「死」を思う。いかに生きていく世の中であっても、自ら命を断つのはおこがましい。

ただ、思うこと。明日も良く生きたいものである。

## 死者たちの“ちがい”に潜む“普遍”

～コモンズ関連企画「生を考える」ワークショップに参加して～

唐沢 民(應典院寺町倶楽部インターンシップ修了生)

山のように積まれた新聞から死亡記事を選び出すという作業は簡単ではありません。私はなかなか選ぶことができませんでした。ある記事を選び、そこからインスピレーションを受けて絵にする作業には、記事と自分との間になんらかの理由があるからです。けれど、紙面にあふれている死亡記事は、私にとっては匿名的な死としてしか映らず、どれも同じに見えてしまいました。

ここで興味深かったのは、自分の思考の変化です。ひとつに絞ることはできないまま、新聞を読み込むうちに、2枚の写真を見つけました。まったく背景の違う2人の死を表すのに、偶然似たような美しい写真の使われている2つの記事に惹かれ、両者を対比させて描こうと思ったのです。しかし、どう表現しようか悩んでいるうちに、新たに違う思いが芽生え始めました。2枚の写真は両者の違いを強調しているのではなく、死というものは生き方が違おうが、国籍や性別が違おうが、みんな同じだということを感じているのではないかという思いです。そして、誰もが迎える「死」という運命の平等性、人の持つ「生きることへの執着」を表そうと、他にもたくさんの記事を貼り付け、たくさんの人を描き込みました。

作品づくりが終わり、みんなで作品を見て回った後、約30人の参加者一人ひとりがワークショップの感想を発表しました。高校生、大学生、医師、教師など多彩な参



加者が集まった今回のワークショップ。何人かの高校生は「死についてじっくりと考えたのは初めてだった」と述べました。また、「手を動かして、絵にしてみても、初めて怖さがわきあがってくる。そして自分は生きてるんだということを改めて実感した」という意見もありました。私も、ふだんの生活で死について考える時間はほとんどなく、たとえそのような時間があっても、一瞬で通り過ぎていきます。時間をかけ、死者と向き合い、その意味を考えたのは初めての経験でした。死に対して自分なりの考えを持

てたことは重要な体験であったと思います。

新聞の中にある死亡記事は膨大で、一方的な情報です。そのマスの情報に受け身でいるのではなく、一人ひとりが検証し直し、世界に対して送り返すことが必要だ、と北山さんは語られました。死亡記事を絵画化する今回のワークショップは、その方法のひとつです。なんらかの視点をもって描かれた作品は、身体的な作業を通して参加者自身の内面を引き出す作業でもあったはず。でき上がる作品はけっして美しいものだけではなく、いのちや魂に関する主題性を持ったものとして私たちに迫ってくるのです。

## 「鑑賞者」とは違う視点で見えてきたこと

～展覧会サポーターへのインタビュー～

畔柳千尋さん(神戸大学大学院 総合人間科学研究科 博士前期課程/日本アートマネジメント学会学生会員)

2年前のコモンズにアートボランティアとして参加したのをきっかけに、今回のコモンズにも参加することになりました。主に、北山善夫さんの作品展示と作品ガイド・ボランティアを担当しました。

北山さんの作品のテーマである「生と死」というものについて考えてみたいと思ったことも、今回のサポーターとしての参加の大きな理由です。作品のひとつに新聞の死亡記事をつつ切り抜いたものがありました。それを應典院の2階ロビーの窓ガラスに大量に貼る、という作業があったのですが、その中で毎日本当に多くの「死」があることを改めて実感しました。そして、「死」に対してあえて立ち向かう北山さんの姿勢に感激しました。

今回の作品の中でとくに印象深かったのは、10月19日に應典院で行われた「生を考える」ワークショップでの参加者たちの作品です。若い学生の参加者にとっては、「死」について考えるという初めての機会だったのではないのでしょうか。その驚きや恐怖、そして生への希望が作品にとってもよく表れていました。若い人たちが「死」というひとつのゴールを意識すること。それが、いまを真剣に生きることへとつながっていくのだと感じました。

(インタビュー:唐沢 民)

中村智子さん(コーチ※)

(※)コーチ……コミュニケーションを通して、クライアントの目標達成を手助けする人

「展示作業はこんなに大変なものなんだなあ」と思いました。でも、舞台裏を見ることができた感じで勉強になりました。サポーターに応募したのは募集記事を新聞で見つけたからなんです。そのときは「應典院」というのをどう読むかさえ知らなかったんです。ボランティア自体、やったことはないのですが、展覧会のお手伝いというのは珍しいし、今年母を亡くしたので「生と死」という作品のテーマに関心もあって、参加することに決めました。展覧会は先行開催されていて、平日に受付を2日間ほど担当したのですが、そのときは静かでこういうものなんだと思っていましたが、コモンズ当日はすごく活気がありました。死亡記事を展示することや、「歴史は死者がつくった」という大型作品を北山さんはまだ書き足しているというのがすごいなあと思ったし、作品がこれのお寺に合ってる感じがしました。これからも應典院に関わっていきたいですね。

(インタビュー:徳山広士)

紙上ワイガヤ・トーク

「私」から「私たち」へ——“ちがひ”をつなぐ、さまざまな試み  
～コモンズフェスタ2003 ドキュメント～



「プライドづくり」を芸術で  
～寺子屋トークに参加して～

石黒良彦 (應典院寺町倶楽部運営委員)

大阪はどうしてこんなに、なんでもワースト記録ばかりのまちになってしまったのでしょうか。大阪を誇りあるまちに再生する方法はあるのでしょうか。都市再生やまちづくりに関わっておられる人々が集まって、議論が行なわれました。ゲストの今中さんは「障害者は自信がない、誇りがなくて生きていけない」と言われます。人間としてのプライドは、自分を支えてくれます。売れるモノが自らの手で作れたときの感動。まちの再生の原点はここにあるのです。わがまちへの誇り、自分への誇り、そして人々の一体感が欠けている現代——。

猿田さんは駒ヶ根市で住民参加の劇を継続的に企画されています。ひとつの目標に向かってみんなで汗を流し、舞台上立ってその姿を見てもらい、楽しんでもらい、自らも感動する。自他ともに喜び合える姿がそこに生まれる。「世の中の役に立っている」——それが心に輝きを与えます。

中山さんは「芸術によって人が育てられる」と言われました。文化は人の心を育み、まちを変える力を持っています。そして大阪にはとくに、その力が潜んでいるはず。そのための「仕掛け人」と「情熱」とをいかに練り上げるかが課題です。

“ちがひ”をつなぐために必要なものは？  
～寺子屋トークに参加して～

西島 宏 (應典院寺町倶楽部運営委員)

朝起きて、仕事して、ご飯を食べて寝る。毎日がその繰り返しの人生、楽しいですか？ 時間つぶしのパチンコやゲーセン、気の合う仲間との飲み会があったとしても、豊かな時間と言えますか？ 今夏に開催した「SPACE X DRAMA 2003」の参加劇団のメンバーが、「テレビの取材に『友達と毎日カラオケ行くのが生きがい』と、同世代の女の子が答えていたのが悲しい……」とつぶやいていました。僕もそうだと気づきました。カラオケだけじゃないでしょ、楽しいことって。アートはその楽しいことの代表選手です。さらに、都市生活者の特権として、多様なジャンルのアートにいつでも触れられることがあるのではないかと——そんな思いが、僕の「まちとアートの底チカラ」です。

トーク前半でゲスト3人の活動報告がありましたが、各20分では時間不足の感がぬくえませんでした。結果、後半は会場からの質疑応答に時間が割かれ、セッションを深めることにいたらなかったことが少し残念です。それは、3人の活動に共通するテーマと、共通しないテーマとの整理、つまり今年のコモンズのテーマである“ちがひ”をつなげられなかったことでしょう。とくにゲストの今中さんが、「アートではなくデザインだからです」と何度も言われていたことが、印象に残っています。



コモンズが生み出すモノの見直しを  
～「あなたも裁判官に選ばれる!？」を開催して～

大門秀幸 (司法NPO～当番弁護士制度を支援する会・大阪)事務局長)

対象者が法律関係者向けでないコモンズでは、毎年タイムリーな話題をと考えており、今回は市民参加の「裁判員制度」を取り上げました。

来年も参加するかと問われたら、わかりませんね。でも、たしか去年もそう言ってたなあ、たぶんまた参加することになるんでしょうね(笑)。

昨年のインタビューでもありましたが、そろそろコモンズも、もう一度原点から見直しが必要という点ですね、今年はどうだったんでしょうか？ いろんな団体や企画が集まってオモシロイ、いま流行のコラボレーション、それだけで珍しいとか価値がある時期はもうそろそろ卒業だと思えます。ライバル企画も増えていることだし、今後はより具体的に得られるモノ、生み出される価値観など、他の機関や会場ではアカン、「コモンズ」から、これが持って帰れた」ってものがないと、毎年同じインタビューを繰り返すことになるような……(笑)。

でも今回は「Art Commons」というテーマが前面に堂々と出ていて、インパクトありました。素直にカッコよかったと思いますよ。

(インタビュー：徳山広士)

“遠い”を“身近”なものに変え、市民意識の高まりをめざす  
～「あなたも裁判官に選ばれる!？」に参加して～

石黒良彦 (應典院寺町倶楽部運営委員)

外国ですでに実施されている陪審員制度。ようやく日本でも、一般市民が裁判に参加する「裁判員制度」が2004年に法律制定され、数年後に施行されます。それについて理解を深めようと本企画は実施されました。

プログラムは、『裁判員——決めるのはあなた』という作品のビデオ上映で始まりました。年老いた姑が公園の石段から落ちて死亡。嫁が突き落としたのか、転落事故か。痴呆症の姑の介護に疲れ、「殺したい」と言っていたという証言。一方、転落したという目撃証言も。無作為に選ばれた市民＝裁判員たちが公判に列席し、裁判官と一緒に判決を決めるのです。この作品では、有罪に傾いていたものが、逆転して全員無罪の評決へと変化。市民の生活体験から出た数々のヒントが判決を変えたのです。いろいろ克服すべき問題はあっても、市民の感覚や意見を裁判に反映できることや、市民の意識が高まり司法が身近に感じられるという利点がこの制度にはあります。しかし、後半のディスカッションで出された意見、「無罪判決を国家権力から勝ちとる」という姿勢はいただけないと思いました。

「ひつじの河川広場は、アートなコモン?」  
～寺子屋トークに参加して～

川上 隆 (大阪府政策室)

よく知っているが、どう訳すのがいいのか迷う「アート」。最近よく聞くが、理解しにくい「コモン」。それに答えてくれたのが、コモンズフェスタと寺子屋トークのゲスト・今中さんでした。「アートとデザインの違いはどこにありますか?」と今中さんに唐突な質問をぶつけたところ、「アートはオリジナルなもので、デザインはコピーできます」。なんと明快な答えでしようか。「子どもがお気に入りのオブジェを作る、この表現活動もアートですか?」と重ねて聞くと、「そのとおり」。

大阪府では地域のボランティアの方たちと協働して、道路・河川の清掃や花植えなどを行うアドプト・プログラム(アドプトは養子縁組。歩道などを地域の養子にするという意味)を進めています(平成12年に始まり、現在329団体、約3万5千人が参加)。中でも和泉市内田町内会の取り組みがユニークです。松尾川河川広場(久保惣美術館裏)では、なんと、放牧されたひつじ2匹(ウッチーくん、タッチーちゃん)も河川の除草に役買っています。なによりうらやましいのは、ひつじの世話から地域の交流の輪が広がり、その広場には子どもから高齢者、青年団にまちづくり関係のNPOまで多彩な顔ぶれが集まるようになったことです。このほり祭りや虫を呼ぶための小川の浄化作戦など、さまざまなアイデアを実行に移しているようです。

そうなんです。ひつじの河川広場がコモン(市民の交流の場)で、清掃や花植えなどがアート(このまちにしかないオリジナルな表現活動)だと妙に納得しているところ。コモンズフェスタでは、「公」と「私」の交わる場として、多様性を認め合う「共(コモンズ)空間」の創造を應典院において試そうとされているとのこと。「社会」と「私」の関係が、ご近所さんとのコミュニケーションが、希薄になっているいま、このようなコモンの存在が新鮮に感じられます。これまで道路や河川といった空間は、もっぱら公の機能(通行や治水など)を担うべく管理されてきましたが、これからはアートなコモン?としても役買えるものと考えています。



アーティストと鑑賞者のコミュニケーションで生まれる“チカラ”  
～第38回寺子屋トーク「まちとアートの底チカラ」に参加して～

徳山 広士 (應典院寺町倶楽部インターンシップ修了生)

寺子屋トークの中でゲスト(\*)の今中さんは、「いちばん言いたかったことはプライドづくりなんです」と述べられました。たとえば商業アートでは、作品の価値がお金によって評価されるという枠組の中で、どの作家の作品も平等に扱われるため、その人にとって自身の作品が評価されることがプライドの形成につながるのです。ただし、評価基準はお金だけでなく、もっと多様なモノサシが必要だと思いますが……。

猿田さんと中山さんは、「演劇によって得られるものは演劇の能力だけでなく、演劇を通じた人とのコミュニケーションなのです」ということを述べられました。集団芸術である演劇は、集団内のコミュニケーションを用いて作品を作り上げていきます。演劇を通じて自己表現をし、観客に評価され、そうしてプライドが形成されるのだと思います。

アート作品への評価は、作品を作る側とそれを受ける側とのコミュニケーションであり、両者が相互に影響し合うことなのです。そうしたことがアーティストを育成し、社会でアートの力を発揮させるものなのではないでしょうか。

(\*)ゲスト……  
中山夏織  
(特活)シアタープランニングネットワーク代表/アーツコンサルタント)  
今中博之  
(社会福祉法人素王会理事長/一級建築士、デザイナー)  
猿田祥子  
(長野県駒ヶ根市市議員/(特活)こまがね演劇文化創造劇場事務局長)



「芸術は人と人を結ぶ架け橋」

～「2Days Drama Cafe」を運営して～

山本セリ(劇団「me-te-hu」××(メテルイイ)代表・演出)

金色の重い扉を開くと、そこには剥き出しになった古びた木の箱と、板。ふだんはお客さんの足の下、椅子とカーペットに隠れたその部分を、私たちはカウンターにした。おそらく舞台を観たことのない人には、いや観たことがある人でも目に触れることの少ない場所、それが舞台裏。このカフェには、そんなものがあふれている。たとえば役者。今日はみな、奇抜な衣装もメイクもなく、素顔のまま、ただそこにいる。そんな芝居人たちが、ちょっとこだわった飲み物と手作りの器に囲まれ、ここを訪れるみなさんをお待ちするのだ。12時開店。初めの扉が開くと慣れないながらも笑顔で一言、「いらっしゃいませ」。なんだかくすぐつたい。入ってくるお客さんたちはさまざまで、お目当てのイベントを見に来る人、友人に誘われて訪れた人、何の催しなのか分からないまま、ただふと立ち寄った人……どの人の目もワクワクしている。「劇団をしているメンバーのカフェなんです」とお話を始めると、みな、さまざまな質問を返して下さり、気がつけば、ついさっき出逢ったばかりの方と将来の夢の話にまで進んでいる。不思議な光景だ。いつもの公演とは一味違う充実感の中、気がつけばときが経っていく。そして、4時。この時間になるとカフェはまた一変する。小暮宣雄助教授の公開ゼミの一環として、役者や詩人、そしてお客様が全員で、お芝居や詩劇を体験するのだ。初めは、「突然お客様に台本を読めと言っても、なかなか盛り上がりがないのでは」と不安に思っていたのだが、そこはゼミの方のすごいところ。「誰かやりたい方はいませんか?」の問いに、挙手、挙手、挙手。うらやましいほどの演劇合戦に突入した。昨日までは顔も見たことなかった人たちと、芸という術(すべ)を通してつながる。まったく違う夢を追う方々との触れ合いで、また私の夢が前進する。芸術とは、けっしてこむずかしい評論のためにあるのではなく、人と人を結ぶ架け橋なのだ、いまさらながらに実感した一日だった。

主催者と参加者をつなぐ試み  
～ディスカッション劇を開催して～

長見有人(NPOココベリ121のヘルパー)

今回の企画は、「ディスカッション劇」というより「劇から始まる"ディスカッション"」でした。導入劇の部分は99年の commons の頃と現在が二幕になっていて、支援費制度が始まってから障害者介護の世界がどう変わったのかを対比しています。ポーカール(濱村)とベース(横)に引き立てられながら、僕が自分自身の役を演じた後に参加者全員と議論しました。

これまでのパネル・ディスカッションなどは、しゃべる側と聞く側が舞台の上と下になって議論になりませんよね。小グループだと皆がしゃべれるので満足されるのですが、ダレますね。今回の「劇からディスカッション」の特長は、理屈だけではなく情緒的な面も演劇で表現できること。自分が自分を演じることで自体のリアリティ。それと、劇とか音楽・踊りはもともと即興的なエンターテイメントだからおもしろい。そんな導入劇の感想なんかを話しているうちに、新たな論点が次々と生まれて意外な展開になる。まさにライブですね。

(インタビュー:唐沢 民)

対話と交流でつなぐ、学生の実践  
～森栗ゼミに参加して～

JO生(應典院寺町倶楽部運営委員)

大阪外大・森栗ゼミの学生が、東京墨東地区の、いまや国際的とも言われる下町に取り組んでいるとのこと、下町に興味のある小生、レポート公開を傍聴させていただきました。

東京にも大阪にも、都会の片隅によく似た地域があるものです。とくに向島と言えば、永井荷風の『墨東綺譚』を思い出させます。いま、どんなまちになっているのでしょうか。

そこへ乗り込んでいき、国際的なまちになりつつある人々と対話によって交流し、まちおこし。そして青少年の健全育成も考え、取り組んでいる姿はすばらしい。さすが大阪外大・森栗ゼミ。

どこともマンションが増えた関係か、町内会も全住民を把握することができず、顔を合わせてもこの誰かわからず、子どもたちを見てもどこの子かわかりません。昔なら町内の各家庭のことはお互い知り合い、他人の子どもでも注意したり、ほめたりしたものです。近所付き合いの多く深いほど、防犯や防火に役立っています。そして、外国人との友好も風習や言葉をなるべく理解し合い、親切心がなによりも大切です。だんだん国際的なまちとなってきた日本、いくぶん不安。

マイノリティとマジョリティをつなぎ、「ちがいを豊かさ」に  
～「朝鮮の古典的な民俗芸能を体感する」を開催して～

宋 悟(在日韓国民権協議会 共同代表)

今回の催しでは、パンソリ(※) 唱者である安聖民(アン・ソンミン)さんに個人史も語っていただきました。大阪に住むたくさんの方の在日コリアンの生活と思いの一端を知ってもらうことで、参加者の人たちに近代以降の日本と朝鮮半島との歴史と現状を振り返る機会を提供できれば、という意図があったからです。参加者には学生の姿も多く、みな真剣に耳を傾けてくれていました。

誰が、何に向かって、何のための発言なのかによって、つまりそのポジションの違いによって、同じものごとに対する見方や意見ががらりと変わります。だからこそ、21世紀に日本がアジアと真の信頼関係を築いていく上で、過去の歴史認識を重ね合わせていこうとする不断の努力が、とても大切なのだと思います。日本において私たちは民族的マイノリティですが、マイノリティだからこそ見えるもの、感じられることがあるのかも知れません。それらを発信していくことで、日本社会を側面から揺るがしていくような存在でありたいと思っています。なぜなら、そのことが日本社会の成熟につながると思うからです。

commons に在日コリアンが企画者として関わるのは、今回が初めてのことでした。「芸術で"ちがいを"つなぐ」というのが今回の commons のテーマだったわけですが、「ちがいを豊かさ」にするような成熟した市民社会の形成に、芸術や文化を通して應典院の果たす役割と期待は、とても大きいと思いました。

(インタビュー:唐沢 民)

※パンソリ……朝鮮の古典的な民俗芸能の一つで、唱者と鼓手の2人だけで演じられる、一種の歌唱劇。国連教育科学文化機関(ユネスコ)が選出する「人類の口承および無形遺産の傑作」に、パンソリも選ばれた(2003年度)。高度な技術を要するパンソリの、貴重な唱者の一人が安聖民さんであり、現在は「民族文化碑マダン」の責任者として各地で公演活動を行っている。

場をつくることで生まれた表現

～社会人大学院生 出前ワークショップを開催して～

井上 淳(大阪市立大学大学院 創造都市研究科 都市経済政策研究分野院生)

創る過程も含めて、良い体験ができたと思います。まだ研究成果を発表できる段階ではなかったのですが、我々がいま学んでいることについてディスカッションをしたいと思います。しかし未来像を話すだけでは、NPO等の活動もただの理想論になってしまうという意識があったので、「お葬式」という場をつくり、映像や照明、時計の音やロック、ジャズ等の音楽で本堂の空間を構成しながら、未来から見た、これからのまちづくりについてディスカッションをすることにしました。僕は皆(ゼミ生)がさまざまな社会経験を持っているので、なんとか場さえつくればおもしろくなると思っていました。皆、自分の持っているものを表現したかったんでしょう。準備は正直大変でしたが、やり終えたら達成感があって、機会があればまたやりたいと思います。来年やるなら、大学院の1年生と2年生と一緒に、ごちゃ混ぜでできそうです。

(インタビュー:徳山広士)

池野 亮  
毎年このことから、commons フェスタが終わった後は、疲労感と若干の寂しさを感じる。寺町倶楽部の最大の事業とっていい commons ゆえに疲労感はあるが、この寂しさは……。人はあなたに出会って私になる」とは、應典院再建からのキャッチフレーズ。今年の commons は、3日間ながらその賑わいは例年以上に感じた。多くの人と出会い、「私」を見つめる時間だった。「あなた」との時間が与えてくれたもの大ききゆえに、感じる寂しさか。来年の commons が待ち遠しい。

大塚郁子

展覧会「eternal」を担当。北山さん、樋口さん、運営ボランティア、劇団サポーター、知恵を貸してくれた人たちに支えられ、展覧会は実現できた。「いのちかけてますから」と語る作家が生み出す作品に包まれ、異なる人生に触れるために出会い、語らう人たちの交流の場に commons がなれたことを願う。永遠に続く歴史の、ほんのひとときに出会えた不思議を感じながら閉じた3日間だった。

柳澤尚樹

「すごいな」と思ったのは、すべての飾り付けが終わったときだ。カフェのカウンターは、應典院の舞台備品である平台と箱馬で生まれ、木の質感どころか釘穴までも露わになって、まさに「バックステージ」。演じているときの、見せる・見るという関係ではない「出会い」に、最初はごちなくとも、やがて話し込んでいく劇団員たち。演劇を素材に自分の言葉で語り、相手の世界を知っていくことによって自分を振り返っているようで、言葉を交わす一瞬、一瞬に「生」の緊張とおもしろさがあった。

川井田祥子

「Art Commons」をテーマに掲げる決断と、その裏にあった「ためらい」。なぜなら、アートがもたらす求心力と遠心力を感じ、従来のような「カオスとしての commons」にはなり得ないのではないかと考えたからだ。でも、それは杞憂だった。自分たちの活動のテーマを貫きつつ、「Art」の意味を読み解いて接点を探し出し、新しい試みにチャレンジしてくれたコラボレーターたち。一方、私は「つなぎ手」としての役割をどれだけ果たせたか? 真摯な人々と接して、自問自答は続く。

暮らしや人権と直結しているアート

～「朝鮮の古典的な民俗芸能を体感する」に参加して～

森栗茂一(應典院寺町倶楽部運営委員)

ユネスコの無形遺産に登録されたパンソリの一部を鑑賞しました。その後、どのような思いで在日コリアン3世が本国で学ぶようになったのか、3世の揺れる思いと、その後の誇りある決意などを伺い、韓国民謡の協同唱和となりました。

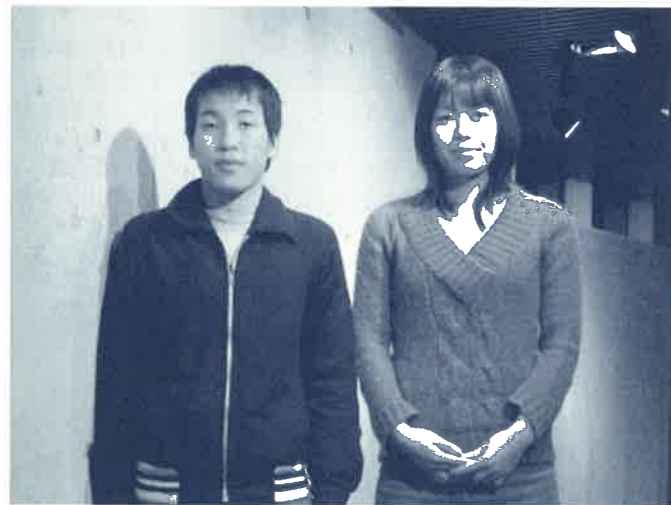
参加して得たことは「①韓民族の誇りの一部に触れて理解が深まった」「②芸能を通じて、生活の誇り・創意がつけられる、まさにアートが実現することを知った」「③植民地支配などの政治問題と3世の立場、思いが、芸能に取り組む姿勢から理解することができた」という3つです。アートは暮らしや人権と直結していることが実感できる、すばらしい企画でした。

(財)大学コンソーシアム京都からインターンとして活動を続けていた2人の大学生が、11月末でインターン期間を終えました。8月からの約4カ月間、コンソフエスタを中心に関わってきた彼らは何を学んだのか。2人からのレポートです。

唐沢 民(立命館大学2回生)

●  
 應典院でインターンをしたと思ったのは、芸術に携わる仕事を体験してみたいという動機があったからです。もともと芸術に関心があり、「観る」だけの関わり方に飽き足らなさを感じていました。NPOという形をとって芸術活動の振興支援をしている事例は以前から本で読んで知っており、実際に体験する機会があったらなあと考えていたのです。だから、大学コンソーシアムの斡旋しているインターンシップの受け入れ先に應典院を見つけ、その事業内容を見たときは「まさに、これだ」という思いでした。

應典院でのインターン活動としてまず



左:徳山さん、右:唐沢さん

挙げられるのは、「出会う」ということ。福祉関係者、まちづくり団体やボランティア協会のスタッフ、社会人大学院生、劇団員など、ギャラリーでは味わえない、應典院ならではの多彩な人々との出会いの場をたくさん与えられました。8月から10月の3か月間に積み重ねたそのようなたくさんのお会い、いままで思っていたよりも広い視野で芸術というものを捉え直すきっかけになりました。そして、芸術ってなんだろうという問いが私の中に芽生えることになるので

すが……。

そんな漠然とした問いを抱えたまま迎えたのが、11月のコンソフエスタ2003。3日間は怒涛のように過ぎてゆき、その場では吸収しきれないほどの体験をしました。飽和状態の中において感じたのは、一体感です。應典院のことをよくは知らない人や、ふだんはなかなか来ないような人たちがたくさん集まってきているのに、そこにいたみんなが心地よい高揚感でつながっていたように思います。「違い」に出会ったからこそ見えてくる「同じ」なところ。それはコンソフエスタ体験と言えりのかも知れませんが、コンソフエスタで目の当たりにした体験の数々は、芸術

ってなんだろうと思っていた私に「多様な人々をつなぎ合わせ、一体感を生み出す力のあるもの」という一つの答えを見せてくれたような気がします。

應典院に来てさまざまな出会いや体験を通して広がった視野と、それに伴って発生した新たな疑問を抱え、今後自分がどこをめざしていけばいいのか、とても迷っています。けれどそれは方向性が見えなくて迷っているのではなく、たくさん見えてきたからこぼれているのです。應典院にインターンとして参加し、感じた迷いや疑問は自分への種まきだったと言えるし、それらを絶やすことなく成長していきたいと感じています。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

徳山 広士(龍谷大学2回生)

●  
 さまざまな催しのお手伝いをしながら学び

應典院を訪れるさまざまな人々に出会い、刺激を受けた4カ月間でした。

インターンシップに参加してもっとも良かったことは、應典院の運営とそで企画を作り上げていく現場に立ち会い、「應典院は訪れる人を通して社会と影響し合っている」と感じられたことです。

コンソフエスタのオープニング企画である寺子屋トークの3人のゲストに依頼書を送ったり、予算書を作成したり、広報活動を行ったりしながら、企画が作られていく様子を内側から見ることができました。そして、コンソフエスタなどの企画に参加された人々が、企画に参加して思ったことや得た情報を自分の現場へ持ち帰り、また逆に、その人の考えや情報を應典院へ持ち込んでくるということが見られました。

應典院と社会をつなげ、相互に影響し合っている現場に立ち会えたことで、「社会に影響する」ということを実感できました。これは20歳の私がこれから社会で生きていくにあたって、たいへん良い経験だと思います。

また、そんな経験をする中で本当にたくさんの人々と出会いました。ほとんどが社会人の方です。社会人と学生の違いを感じることも多く、社会人の方々と出会う機会が多過ぎてしんどいなと思ったこともありました。良い刺激となりました。

インターンの活動日に行ってもあまり仕事のない日時もあり、そのことが事前にわかればなと思うことや、コンソフエスタなどでインターン自身が独自の企画を立案・運営してみることもやってみたくはあったのですが、4か月足らずでは時間的にむずかしく、できないなと思ったこともありました。でも、さまざまな人々と出会いながら貴重な経験ができ、本当に應典院のインターンシップに参加して良かったなと思います。

これから私は、大阪市西成区にある釜ヶ崎地区のNPOで、まちづくりの活動をしていくつもりです。また、應典院ともなんらかの形で関わっていくと思いますので、應典院で私を見かけることがあるかも知れません。その際は声をおかけ下さい。

大蓮寺の住職として初めての五重相伝を務めました。5日間、寺に籠り、浄土往生の教えをしっかりと体得し、住職と檀信徒がしっかりと師弟の契りを結び、いわば浄土宗の信仰道場です。

外からながめていると、いささかいかめしく、古臭い印象もありますが、道場に投入して57名の受者とともに念仏礼拝に明け暮れてみて初めて、からだを通じてわかっていくことがあります。たとえば声を合わせて念仏を申す、ということの身体的な一体感。礼拝をしながら、先祖と響き合う呼応の関係。どれもが大勢の同信同行の人々が皆ともに励まし合い、支え合う、慈悲の共同体としか言いようのないよここびを感じました。

仏教は頭で考えるのではない、からだで受けとめるのだ、と言います。導師の私は背中いっぱい、新弟子たち(恐れ多くもありがたい)の念仏の呼びかけを受けとめていました。なんと仏教とは、わが身をかくも軽々と編集してしまうものなのか、ふとそんなことを感じました。

### ■トヨタ・アートマネジメント講座で発言

去る10月11日、名古屋市の愛知芸術文化センターにて、第50回トヨタ・アートマネジメント講座が開催、「これでいいのか? アートマネジメント」と題し、アートマネジメントをめぐる現状の問題点について議論が交わされました。私も第2分科会「<市民のための文化施設>って?」のゲストとして発言、その後の全体会でも、市民の立場から芸術と社会をどう考えるか私見を述べました。このセミナーは、企業メセナによる日本のアートマネジメントの先駆として知られていますが、今回は来年1月24・25両日、なんと應典院寺町倶楽部が主催して大阪で開催されます。乞ご期待!

### ■仏教ルネッサンス塾



東京愛宕の青松寺で、去る10月18日、第4回仏教ルネッサンス塾が開催、塾長の上田紀行さん、神宮寺の高橋卓志さんらと一緒に「お寺はこんなに面白い」と題して、トークセッションに出ました。

應典院の活動を映像で紹介しながら、「若者とお寺をアートでつなぐ」実践を紹介、

## 大蓮寺で「身内葬」の提案

お葬式の多様化の中で、いま注目されているのが「身内葬」「家族葬」と言われる密葬形式のものです。ともするとイベント化しがちな葬儀ですが、家族の死を悼み、心を込めて見送ろうという切なる気持ちが、「身内葬」にも表れています。

大蓮寺では、出入りの葬祭業者である阿波弥と提携して、本堂を使った「身内葬」のモデルプランを作成しました。屋外の飾り付けやテントはなし、コストを下げ最大40名の会葬者に対応しています。

「身内葬」の基本は「その人らしい最期」をどのように実現するか、であって、儀式の内容についても徐々に相談に応じていきたいと思っています。

本当にいいお葬式とは、規模や数とは無関係です。納得のお葬式を、一緒に考えながら作っていきたく願っています。



## 秋田住職発

# 應典院 掲示板

会場からは次々と質問が出て、200人の会場は盛り上がりました。

いちばん感心したのは、この塾をお寺挙げ推進されている青松寺の姿勢。都会の大寺がポーズだけというのはよくあるのですが、方丈さまが先頭に立って、家族も隨身も雲水もみんなやってるのが清々しく感じられました。しかし、すごいお寺です。上京の折には一度見学の価値ありです。

### ■YMCAの高校生たちとともに

阿倍野のYMCAの単位制高校より「大阪の文化講座」の依頼があり、應典院をはじめ「上町台地からまちを考える会」の仲間と一緒に3カ月間、計11時限の授業を進めています。

私は、第1回の「上町台地の文化」と第6回「寺町フィールドワーク」を担当、ふだんから社会教育ではよく扱う題材なのですが、相手が若いティーンズなので最初は少し緊張気味だったものの、やはり現場に対する興味はひとしおのようでした。高校生たちは、寺町以外にもコアタウン、空堀商店街などをまち歩きしました。

こうやって、地域の大人と子どもの関係が広がっていくといいですね。

### ■自分感謝祭

恒例の自分感謝祭が、今年も12月26日(金)に開催(14時・18時の2回)されます。この一年の自分を仏様に懺悔して、新しい一年に誓いを立てる、新しい感覚の法要です。住職の法話と藤田礼子さんのオルガン演奏があります。

夜の部は閉会後に年忘れ交流会もありますので、ふるってご参加ください(参加無料・交流会は1000円要)。